

義経伝説と熊野信仰

—北からの視点を取り入れた日本史・世界史融合にむけて—

Legend of Minamoto Yoshitsune and the Kumano Faith

For fusion of Japanese history and World history that adds the point of view from the northern area

篠塚 明彦*

Akihiko SHINOZUKA*

要 旨

源義経をめぐる様々な伝説の一つに北行伝説がある。荒唐無稽な義経北行伝説ではあるのだが、その伝説形成の背景には熊野信仰の広がりや修験者たちの活動があったことが浮かび上がってくる。熊野の人々や修験者は、北方の交易世界に引き寄せられるように北を目指した。そこから見えてくるものは、現在置かれている位置づけとは異なる北東北の世界である。北東北は、日本の終焉の地と見られていたが、実際には北方ユーラシア世界への入口であった。こうした事実をもとにしながら、日本史・世界史融合の具体像について探ることを目指す。

キーワード：義経北行伝説 熊野信仰 北東北 北方世界 日本史・世界史融合

1. はじめに

次期の指導要領改訂に向けて、中央教育課程審議会（中教審）での議論が進んでいる。中教審の議論の中では、高校地理歴史科について日本史と世界史を融合した新科目の在り方が模索されている。一方、これまでも高校現場では、日本史と世界史を統一的に捉えようとする考え方や実践が模索されてきた。そうした実践は必ずしも一般的になっているとは言えないのだが、例えば「地域から考える世界史プロジェクト」¹のような取り組みなどによって一定程度の実践的蓄積はなされつつあるものと思われる。しかし、こうした取り組みにおいても世界と日本の結びつきといった場合に、山口や堺、博多、長崎といった西日本と世界との結びつきが中心となっているように思われる。「世界との結びつき」といったときに、どうしても九州や中国地方と中国・朝鮮・東南アジアなどとの関係性に目が向きがちである。こうしたこと背景には、世界との交流は「西や南から」ということが前提となり、北からの影響や北方世界との結びつきに対する視点の弱さがあるのではないだろうか。確かに、西日本の各地と世界が結びついていた事例が多いのも事実である

う。しかし、それであってもやはり北からの視点が弱いということは否めないであろう。

外国文化の流入や交流の窓口は西という潜在意識の表れは観光庁認定の「広域観光周遊ルート」の中にも見て取ることができるように思える。観光庁では、複数の都道府県を跨って、テーマ性・ストーリー性を持った一連の魅力ある観光地をネットワーク化し、外国人旅行者向けに「広域観光周遊ルート」の策定を促進してきた。これに基づき、2015年6月に七つの広域観光周遊ルートが認定された²。この中で、東北（新潟県を含む）については、「日本の奥の院・東北探訪ルート」（“Exploration to the Deep North of Japan”）が認定された。「日本の奥の院」というこの観光ルートの名称からは、「東北＝奥」という潜在意識があるように思えてならない。多くの外国人にとっての日本の玄関口である成田空港からの距離や移動時間といった物理的な面から考えると、必ずしも東北が「奥」とは言えないはずである。やはり、意識の問題として「東北＝奥」なのであろう。東北全体が「奥」であるのならば、北東北は差し詰め最奥部ということになるのだろうか。最奥部ということは、北東北は首都圏や関西圏を中心とした場合、日本の「周縁」と位

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Education, Faculty of Education, Hirosaki University

置づけられることになり、モノや人が最後にたどり着くところということになる。あるいはこうした意識が根底にあることが、復興の遅れや核関連施設の配置といったことにも繋がっているのではないだろうかと考えたくもなるのである。

日本の各地域は、共通性と独自性をもちながらそれぞれの文化を形成してきた。そしてまた、それぞれの地域が様々な形でアジアや世界と繋がりをもってきたはずである。中央中心の歴史観にとらわれることなく、いくつもの「日本」(＝日本列島史)的視点を形成し、日本の各地域を対等なものとして捉えられるような観念を形成していく上で、どのようなことが可能なのであろうか。あるいは必要なのであろうか。本稿では、日本史と世界史の融合を意識しつつ、具体的な教材の在り方について検討を加えてみたいと考える。

歴史学の分野では、奥州藤原氏の活動、津軽安東氏の活動などに着目しながら、中世において都の勢力とは一線を画した独自の政治・文化世界の形成や、北東北に軸おいたアジアとの結びつきが存在していたことが明らかにされてきている³。本稿ではこうした歴史学の成果も踏まえながら、中学校や高等学校での教材化ということを視野に入れ、中学生・高校生の興味を惹くであろう「義経北行伝説」というものを手がかりとしながら、北方ルートでの北東北と世界との関係性について考えてみたいと思う。

2. 義経北行伝説

源義経の北行伝説とは、概ね次のようなものである。源義経は、藤原泰衡に襲われ衣川で自害したとされるが、自害したのは身代わりであり義経は衣川を脱出した。そして義経は弁慶などの家臣たちとともに北上高地をこえて沿岸部に到達し、現在の陸前高田あるいは釜石の辺りから海岸沿いに北上し、八戸に上陸、青森県津軽地方を経て、北海道に渡った。さらには、北海道からサハリンを経由して大陸に渡りモンゴル高原にまでたどり着いたとするものである⁴。義経一行がたどったとされる岩手県・青森県・北海道の各地には、様々な義経ゆかりの伝承が今でも語り継がれている⁵。この義経の北行譚は、あくまでも伝説であり、当然のことながら史実とは異なる全くもって荒唐無稽なフィクションでしかない。だが一方で、フィクションだとわかっていながらも長い年月にわたり人々の関心を惹きつけてきたこともまた事実であろう。そもそも、こうした義経伝説はいつ頃から形成されたのであ

らうか。

義経は北行伝説に限らず、幼少期からの伝説の多い武将でもある。そのような中で、源義経を主人公とした軍記物に『義経記』がある。『義経記』は悲運の貴公子として義経を描いたフィクション性の強い義経伝であり、判官鼻肩などを背景に成立したもので、多分に伝説的要素も含まれている。いわば、歴史的事実をもとにしながらも、大幅な加工や脚色を加えられて成立した物語である。義経の死後、その悲劇性が人々の共感と呼び、史実が加工された結果、南北朝頃に『義経記』は最終的に成立したものだと考えられている⁶。つまり、義経の死後早い段階からその伝説化は進んでいたわけである。義経が衣川を脱出し北海道に渡ったとする北行伝説がいつ頃から言い伝えられるようになったのか、残念ながら明確な時期を特定することができないのだが、こうした義経の伝説化と軌を一にして成立したものと考えられる。江戸時代の初期には、かなり明確な義経北行伝説が形成されており、水戸藩(水戸光圀)編纂の『大日本史』や、林羅山が編纂した『本朝通鑑』においては、義経の大陸渡航ということにまで言及されている⁷。義経の衣川脱出という伝説は、かなり早い時期に成立していた可能性も考えられる。

北行伝説はあくまでもフィクションであり、史実ではない。しかしながら、つぶさに見るとそのルートは意外にも詳細であり、また現実的なルートと思われるようなものにもなっている。そこで次に、八戸上陸以降の現在の青森県域における義経の北行ルートを見ることにはしたい。

3. 津軽における義経

江戸時代中期に記され、八戸市丸にある竈(オガミ)神社に残されている『類家稻荷大明神縁起』や郷土史家たちの整理など⁸をもとに青森県域における義経の足取りを確認してみる。先述の通り、義経は現在の陸前高田あるいは釜石付近から海路北上した。そして、まず八戸の種差海岸に上陸し近くの熊野神社に立ち寄った後、再び海路北上して八戸の浦(現八戸港)に到達、上陸している。その後、現在の八戸市内にしばらく留まり八戸の各地に足跡を残しているという。数年後、八戸を後にして海路北上し、現在の六ヶ所村平沼に至る。ここからは陸路を津軽に向かっている。現在の東北町坪では「坪の石文」を見て、「三熊野の つづく小山のふみ石を みるにつけても 都恋しき」

という和歌を詠んだとされる。その後、現在の青森市内に至っている。青森では野内の貴船神社、安方の善知鳥神社、油川の円明寺に立ち寄り、あるいは一時逗留している。そして油川を後にした義経は、津軽半島を横断し、十三湖のほとり（十三湊）にある壇林寺に向かい、ここにしばらく留まっている。その後、十三湊から現在の今別町を経て三厩に至り、ここから蝦夷ヶ島（北海道）へと渡ったとされている。以上が伝説に見られる青森県域における義経の足取りである。

ここでまず興味深いのは、北海道を目指しながらも下北半島沿いに北上して、そこから直接北海道に渡ってはいないということである。これはある意味で現実的なルートとも言える。下北半島沿いに海路北上し、本州最北端の大間崎から北海道を目指すとなると、その前に尻屋崎（東通村）を回り込むことになる。ところがこの尻屋崎は現在でも海の難所とされている。かつては「難破岬」とまで言われて地元の漁民たちに恐れられていたほどの場所である。尻屋崎の周辺海域は濃霧多発地域であり、また潮の流れも速い。さらには尻屋大根と呼ばれる暗礁まであるために動力を持たない船では、すぐに操縦不能となるというのである⁹。従って、尻屋崎を避けて六ヶ所あたりに上陸し、津軽半島を目指すというはある意味で合理的なルートを選択しているとも言えるのである。

次に興味深いことは、義経が立ち寄ったとされる土地には、熊野信仰や修験道の影響が見て取れることである。熊野那智神社編集の『熊野三山とその信仰』（1942年刊）などによると種差海岸、六ヶ所村平沼、油川、十三湊、今別には、確実な創建年代は不明ながらも、いずれも古くからの熊野神社（あるいは熊野宮）が祀られていることがわかる。種差海岸では直接熊野神社に立ち寄ったとされているほか、油川の円明寺があったとされる場所は、油川熊野宮の敷地内である。また、義経が立ち寄ったとされる土地で直接的な熊野信仰の痕跡が見出せない他の場所、つまり古い創建の熊野神社の存在が確認できない場所でも修験道との関係をうかがい知ることができる。修験道とは、山での厳しい修行を通じて悟りをひらき呪力を体得しようとするもので、山岳信仰と仏教（特に密教）とが融合する形で、8世紀末から9世紀初め頃に形成された信仰である。この修験道の実践者は修験者あるいは山伏と呼ばれた。修験者（山伏）にとって、熊野は大変重要かつ神聖なる修行の場であり、紀伊半島の中央部、吉野から熊野に至る山塊こそが修験道揺籃の地とも言われている¹⁰。つまり、修験道と熊野信仰とは非

常に密接な結びつきを持ったものなのである。

「坪の石文」（現東北町坪）を見た義経は、先述の通り「三熊野の」と熊野三山を読み込んだ和歌を詠んだというように、ここからは熊野の陰をうかがうことができる。また、この石文が発見された場所のすぐ近くには青森県最古の神社とも伝えられている千曳神社があり、石文はもともと神社の中に置かれていたという言い伝えがある。この千曳神社の入口付近に立てられている由緒には、「山伏修験道本山派五戸多門院の配下、上北郡横浜八幡別当大光院の霞に属したが一時花巻の神官稲田遠江の支配に属したこともあった。」とあり、修験道のもとにあったことがわかる。「坪の石文」が置かれた付近には明らかに修験道の影響が及んでいたといえる。さらに、野内の貴船神社についても、修験道との関係がうかがわれる。「貴船宮五穀成就発起」という文書から、江戸時代初期には花言坊という修験者がこの貴船神社の別当を務めていたことがわかる¹¹。また、貴船神社の祭神である高麗神（タカオカミノカミ）は水を司る龍神であり、修験道は龍神信仰とも深い関わりを持っている¹²。こうしたことから、野内の貴船神社についても修験道と関係性のあることがわかる。そもそも全国の貴船神社の総本宮である京都の貴船神社は、山岳修験と関わりを持つ鞍馬山の山麓にある。なお、八戸に逗留中の義経について記された『類家稲荷大明神縁起』が残されていた龍神社も貴船神社と同様に祭神は高麗神である。このことから八戸の龍神社においても修験道との関係の可能性を考察することが出来るのではないだろうか。この龍神社には、山伏（修験者）によって伝承されたという山伏神楽が今なお伝えられている。

ここまでみたように、伝説の中で義経が立ち寄ったとされる場所では、ことごとく熊野信仰あるいは、熊野信仰と深い関係にある修験道との関わりを見て取



ることができるのである。唯一、青森市安方の善知鳥神社のみが、熊野信仰や修験道との関係性を見出すことができなかつたところである。このように青森県における義経ゆかりの地からは、熊野信仰や修験道との関わりが浮かび上がってくるのだが、同様のことは衣川から八戸に至る途中の岩手県内においても言えそうである。それにしてもなぜ義経伝説と熊野信仰・修験道との間にはこうした関連が見えてくるのだろうか。

4. 義経と熊野・修験道

ここまでみたように、義経北行伝説と熊野信仰・修験道との間には、深い関わりがあったことがわかってきた。そもそも、伝説上の義経でなく、実在の武将としての義経の周辺にも熊野信仰や修験道との関わりを見て取ることができるのである。そこで、実在の武将としての源義経のまわりにみられる熊野信仰や修験道との関わりについて以下整理をしてみたい。

牛若丸と名乗っていた幼少時代に、義経が鞍馬山で育ったことは有名な話である。この鞍馬山だが、現在は修験者の修行の場とはなっていないのだが、元来は修験の地であった可能性が高い。鞍馬山は「大天狗」の住む山として知られている。「天狗とは、もとは山の怪奇現象の意味であったが、実体化され室町時代以降には修験者と同じ視され、羽団扇を持ち高下駄を履く、長い赤鼻の鼻高天狗や翼を持つ鳥天狗などになった」¹³というように、天狗と修験道とは密接な関わりがある。大天狗の住む山とされた鞍馬山はやはり修験者たちの修行の場であったのだろう。

1180（治承4）年、兄である源頼朝が平氏政権打倒のために挙兵すると、義経も参陣して瀬戸内海沿岸を東から西へと軍を進め、最終的には壇ノ浦において平氏を滅亡に追いやっている。瀬戸内海周辺という海を舞台とした戦いでは、当然のごとく水軍の協力が必要となってくる。このとき、摂津や伊予の水軍とともに熊野水軍が義経に協力している。特に壇ノ浦の戦いでは、熊野別当湛増が統括する熊野水軍の協力を得ることで義経は勝利している。日本中世史の大石直正は「義経の瀬戸内海での軍事的成功の陰には、伊予の河野氏などとともに熊野水軍の協力があつたと考えてよいであろう。」¹⁴と指摘している。義経の成功の陰には熊野水軍の存在があつたわけだが、この熊野水軍の将としても活躍し、義経の家臣となつていたのが鈴木三郎家重と亀井六郎重清の兄弟（義兄弟との説もある）である。彼らは、熊野の白藤鈴木氏の一族である。弟

とされる亀井重清は、梶原景時の讒訴によって義経が頼朝からの嫌疑をかけられ時に、弁明のための使者として鎌倉に送られた家臣である。義経が頼朝に疎まれた後も、鈴木・亀井の兄弟は臣従し、義経を追って平泉に赴き側近として付き従い、最期は衣川で藤原泰衡の軍勢と戦い討ち死にを遂げている。鈴木・亀井兄弟のほか、義経の家臣として最も有名な武蔵坊弁慶は、実際のところは定かではないものの、熊野の別当の子であると言い伝えられている。弁慶も鈴木・亀井の兄弟と同じく義経に最期まで付き従い討ち死にしている。義経最期の場面には、熊野に関わる者たちがいたわけである。

ところで、神奈川県川崎市麻生区から隣接する東京都町田市北東部（能ヶ谷、鶴川付近）にかけての一带にも義経伝説が残され、義経ゆかりの地が点在している。川崎市麻生区古沢には、「九郎明神社」という小さな神社が今もひっそりと建っている。この神社の祭神は、伊邪那岐命、菅原道真、九郎判官源義経とされている。義経そのものが祀られているわけである。実は川崎市麻生区から町田市北東部付近一帯の地域は、熊野との関わりをうかがうことのできる土地なのである。町田市能ヶ谷という地域は、熊野から移り住んだ武士団が拓いた土地とされている。伝承によると、紀州田鍋郡の神蔵勘左衛門重信、鈴木四郎左衛門、夏目与三衛門、森半兵衛が拓いたとされている¹⁵。鈴木四郎左右衛門とは、先の鈴木家重と同族の白藤鈴木氏の出身のものであるだろう。また、神蔵勘左衛門重信の神蔵とは熊野の神倉神社と関わる苗字と考えられる。神倉神社は熊野新宮速玉大社の摂社の一つである。熊野新宮速玉大社の背後の山並みは熊野神が降臨した霊域と見なされているが、その南端に位置する神倉（蔵）山の山頂には磐座であるゴトビキ岩と、それを御神体とする神倉神社が安置されている¹⁶。神蔵重信とは、この神倉（蔵）山や神倉神社にゆかりをもつ一族の間人であろう。現在でも、能ヶ谷周辺には、鈴木姓、神蔵姓の旧家が多く見受けられる。さらに、能ヶ谷に隣接する川崎市麻生区には、現在は町名から消えてしまったが、かつては「亀井」という字が存在していた。現在でも橋の名称やバス停にその名残を見ることができる。この亀井とは、先の亀井重清の所領であり、居所があつたところとされている土地である。現在では他の神社に合祀されているか、あるいは他の神社の境内社とされているところもあるが、周辺には複数の熊野神社が存在していた¹⁷。先述の九郎明神社にも熊野神社が合祀されている（伊邪那岐命は熊野神社

の祭神である)。また、実際に九郎明神社を訪れてみると神社の周辺に鈴木姓の旧家が何軒もあることに気づかされる。おそらくは、九郎明神社の周辺も熊野系の白藤鈴木氏一族の居住地であったのだろう。

このように義経やその伝説化と熊野との間には何らかの深い関係性を見出すことが可能であろう。しかし、実際には、義経ゆかりの地に熊野信仰を見出すことが出来たのではなく、むしろ熊野信仰あるいは修験道の影響が広がった土地で義経伝説が語られるようになっていったとみるほうが妥当なのではないだろうか。そうであるならば、先に見た青森県域における義経北行伝説の成立背景にも、熊野信仰や修験者たちの活動があった可能性があるということだ。岩手県沿岸部から青森県にかけての義経ゆかりの地は、そもそも熊野の人々や修験者たちが活動していたところであった。そうした土地において、熊野や修験道との関わりの深かった義経にまつわる伝説が語られるようになっていったと考えるのが妥当なのではないだろうか。伝説の中で義経がたどった足取りとは、実際には熊野の人々や修験道たちがたどったルートであった。それゆえに現実的とも思えるルートが設定されていたと考えることができるのではないだろうか。近年の考古学の研究成果によって、9世紀の後半以降、青森にも修験者が入り込んでいた可能性の高いことが明らかにされている¹⁸。義経北行伝説は、古くから青森に入り込んでいた修験者たちの活動ルートの一端を浮かび上がらせていたとみることができるのである。

ところで、先に修験道とは山岳信仰に源流があると述べたのだが、それではなぜ熊野信仰や修験道が水軍や海上ルートのように海とかかわるのであるだろうか。熊野信仰・修験道と海との関わりについて修験道の研究者である豊島修が述べている。その説明は概略以下のようなものである。

深い山中に位置している「山の熊野」の本宮をささえたのは山岳宗教であるが、熊野はこの山国の顔とともに、もう一つ「海の熊野」の顔をもっている。それは、南に太平洋・熊野灘に面した海と島の巖の海国としての顔である。熊野三社のうち速玉大社と那智大社とは海の熊野であった。熊野三山の神々は、本来別々の発祥と信仰があり、まず海の熊野が山の熊野に先行して存在し、そののち海の熊野は、山中他界の「山の熊野」である本宮の山岳信仰に吸収された。海の熊野の那智大社は、熊野三山信仰が成立する以前は海上他界・海洋他界の常世を信仰対象として、辺路修行を中心とする初期修験道的な熊野信仰をもっていた¹⁹。

つまり、熊野信仰には本来的に海上他界・海洋他界といった世界観があり、海とは大変に密接な結びつきをもっていたのである。そのために、熊野信仰や修験道は水軍や海上ルートといったこととも必然的に関わったのである。

5. 熊野・修験者と北方世界

これまで義経北行伝説の背景には、熊野の人々や修験者たちの青森県域での活動があったことを明らかにしてきた。それでは何故に熊野の人々や修験者たちは北を目指したのだろうか。青森県域にまで活動を広げていた目的とは何であったのだろうか。

先述の通り、近年の考古学の成果によれば青森における修験者の活動は9世紀後半にまで遡れる可能性があるという。9世紀の後半といえば、平安王朝の時代ではあるが、平安王朝の勢力は北東北にまで強力に及んでいたとは考えられない状況である。

ここでまず着目しなければならないのが、鉱山開発と修験者との関わりである。古代・中世における東北地方太平洋岸の産金地帯に修験者たちが関わりを持っていたことはすでに明らかになっている²⁰。そもそも修験者にとって、金・銀・銅・鉄といった金属を産する山は信仰の対象となっていた。このことについて井上鋭夫が次のように述べている。「この信仰対象である聖なる山が、すべて「カネ」（金・銀・銅・鉄）を産出したとは言えないとしても、「金山」がすべて信仰対象であったことは十分に考えられる。験者にとって、「金」は財的価値よりも聖なる価値をもつものであり、仏であり光明であった。ここに中世宗教と鉱山採掘との密接な関係が生まれる。戦国大名が鉱山採掘を大規模におこなう以前においては、鉱山採掘は験者（または僧侶）の経営するところであった。」²¹本来的には鉱山開発・採掘は信仰との関係性の中で生じたものであったのが、やがて財的価値も付与されるようになっていったものなのだろう。先述の町田市北東部から川崎市麻生区という熊野との関係性の深い土地では、古代の製鉄遺跡（上麻生大ヶ谷遺跡）が見つかっている。また、この地域から鶴見川を3kmほど下流に行くと「鉄（クロガネ）」（横浜市青葉区）という地名の町がある。さらに麻生川（鶴見川支流）を3kmほど上流に向かうと「金程（カナホド）」（川崎市麻生区）という地名にたどり着く。いずれも金属との関連性を想起させる地名であり、あるいはこの付近も砂鉄などを産出していたのかもしれない。全くの推測では

あるが、熊野出身の人々がこの地に入ったのも、あるいは鉄との関わりであったのではないだろうか。

さて、次いで着目されるのが、熊野水軍と商業との関わりである。水軍とは、有事の際の姿であり、平時においては商業や海運業に従事していたというのである。奥州藤原氏の政権の拠点であった平泉からは大量の常滑焼が見つかる。知多半島で生産された常滑焼は、太平洋岸の航路を使って平泉へともたらされていた。この常滑焼の輸送に従事していたのが熊野の人々だったのである²²。

熊野水軍とは武装した修験者集団であり、布教とともに海運や交易にも従事していたのである。修験者たちが本州の北端にやってきたのは、10世紀頃にすでに交易型社会へ転換し多くの産物を本州へ移出しはじめた北海道に対して強い関心を持っていたからではないかということが指摘されている²³。熊野の人々や修験者にとっては、鉱山資源を産出する可能性をもち、交易が活発化していた北海道という土地は魅力的な存在であったに違いない。当然、熊野の人々や修験者たちが青森からさらに北海道に渡り、交易型社会にあった北海道の人々と直接接したことも十分に考えられる。それを裏付けるように、北海道からも修験者たちの活動の痕跡がみつまっている。北海道厚真町の上幌内モイ遺跡では、炭化イナキビ・被熱した銅鏡などの密教系儀礼の痕跡がみつかり、北海道において密教・山岳宗教などの中央に由来する祭祀・信仰が伝播していた公算があることが指摘されている²⁴。また、厚真町の北西に位置する千歳市の末広遺跡では、10世紀代の竪穴住居から修験者のもつ錫杖の金属部分がみつかり、これは修験者がこの地域に入り込んでいたことを示すものとされている²⁵。厚真というところは、北の上川方面、東の十勝や道東方面、西の石狩低地へと通じる道央太平洋岸の陸路の結節点であり、交易・経済活動の拠点であった地である。厚真周辺からは大陸の靺鞨文化・女真文化に特有の出土物も発見されている²⁶。厚真を結節点としたその交易の道は大陸にも伸びていたことになるのである。さらに、道東方面に向かえばその先にはオホーツク海域世界が広がっている。8～10世紀頃には、サハリン・北海道・千島列島に囲まれたオホーツク海域一帯にはオホーツク文化が存在していた。そして、このオホーツク文化圏から北海道へアザラシやラッコなど海獣の毛皮などが供給されていた²⁷。厚真にはこうしたオホーツク海からの交易品も集積されていたことだろう。厚真周辺は、北海道のみならず、大陸やオホーツク海の交易世

界といた北方世界と結びついていたのである。

ところで、熊野の人々や修験者の活動と義経伝説が関係あるのであれば、修験者の活動がうかがえる厚真やその周辺の地域にも義経伝説を見出すことができるであろう。『厚真村史』を探してみると、はたして厚真にも義経伝説を見出すことができたのである。厚真にあるトンニカ三角山は、衣川から逃れてきた義経が北海道に渡りしばらく逗留したところであったという。そして、山の中には義経の遺品が埋められていると信じられ、山に自由に近づくことは禁じられていたというのである²⁸。なお、厚真のすぐ東に位置する平取にも義経神社が存在するのだが、これは江戸時代後期にアイヌの人々が崇敬していたオキクルミという英雄を源義経と同一視して祀るようになったものなので、これまでみてきた義経伝説とは些か異質なものと言えるだろう。

鉱山資源や交易活動を目的として、熊野の人々や修験者たちは太平洋沿岸を北上して岩手県域から青森県域へ、さらには北海道へとその活動範囲を広げていったのである。そして、結果的に彼らが行き来したルートに沿って、熊野や修験道との関わりが深かった源義経の北行伝説が形成されていった考えることができるのである。

6. ユーラシア北方の交易世界との結合

義経伝説の形成や修験者たちの活動の背景には、10世紀頃、北海道が交易型社会に移行し、その影響が青森などの本州北部にも及んでいたことがあげられる。これは、北海道よりもさらに北の交易社会の形成が北海道や本州北部にも及んだものであり、本州北部の世界は北方交易世界への入口であったことを示している。つまり、平安京を中心に据えて捉えると、青森を含む北東北は周縁の地となってしまうのだが、北方ユーラシア世界に視点を置くとすると北東北は入口の地となる。終わりの地ではなく始まりの地となるのである。

そもそも、北海道が交易型社会に移行した背景には、北方ユーラシア世界を含む東アジア世界での大きな変化を考えることが必要となってくる。そこで、この時期の東アジア世界における状況の変化について、整理をしてみたい。

7世紀から8世紀前半においては、唐を中心に東アジア世界が形成され、周辺諸地域は唐との朝貢関係によって強く結びついていた。しかし、8世紀中庸以

降、唐の求心力は急速に低下することになった。8世紀半頃には人口の増加や商業の発達にともない農民の間には貧富の差が拡大した。その結果、没落して土地（均田）を放棄し逃亡するものも増加した。そのために均田制・租庸調制さらには府兵制も崩れさっていくことになった。均田制を基礎とした府兵制にかわって募兵制が採用され、749年には全面的に府兵制が廃止されている。そして、募兵制のもとで、募兵の指揮官である節度使が置かれ、彼らが辺境防衛の任にあたるようになったのである。しかし、辺境地域の財政・民政・軍政面を掌握した節度使たちは次第に自立化傾向を強めていくことになる。一方、税制面でも租庸調制にかわり、780年には両税法が採用された。両税法は、土地への課税を行うもので、実質的に土地の私有が認められたことになる。すなわち、公地公民の原則が崩れ均田制が完全に崩壊したのである。周辺諸国にも大きな影響を及ぼすほどの唐王朝の強力な支配力は、均田制を柱に租庸調制と府兵制という税制面と軍事面とによって支えられたものである。均田制が維持不可能となり、軍事面、税制面で、府兵制と租庸調制からの転換を余儀なくされるというように、8世紀半以降、唐王朝は大きく動揺し、周辺への影響力を急速に失っていくこととなったのである。唐の求心力が低下した結果、中国を中心とした朝貢関係は衰えることになったのだが、このことはかえって東アジア諸地域間の民間交易を活性化することとなり、東アジア諸地域間での交易は活発となっていた。最終的に、唐は907年に滅亡し、五代十国の分裂期を経て、960年には宋が中国を再統一することになる。しかし、宋の勢力は、全盛期の唐とは比べるべくもない脆弱なものであり、周辺諸国の自立化傾向は変わることがなかった。そのために、東アジア世界では10世紀以降も民間交易を中心とした経済の活性化は維持されることとなったのである。ここでいう東アジアとは渤海や契丹が成立した地域（すなわち、北アジアや沿海州）そして、サハリン・オホーツク海域を含む地域である。この東アジアにおける交易の活性化は北海道にも及び、交易型社会の形成を促した一因となったものと考えられる。8世紀後半以降の東アジア情勢の変化のなかに北海道や北東北が位置付けていたのである。

9～10世紀、東アジア情勢の大きな変化が北方ユーラシアから北海道に至る交易の活性化をもたらした。そして、北回りルートでの交易の活性化に引き寄せられるように熊野の人々や修験者が日本列島を北へと目指したのではないだろうか。修験者たちは周縁へと広

がったのではなく、大陸との交易の入口、より広い交易世界への入口を目指して北を目指したのだと考えることができるであろう。

7. おわりに

義経北行伝説を追うことで、熊野の人々や修験者の活動が浮かび上がってきた。そこに浮かび上がった熊野の人々や修験者の活動は必ずしも中央から周縁へと押し出されたのではなく、むしろ積極的に北の世界を目指したとも言えるものであった。それは、日本列島の北の世界が北方ユーラシア世界へと連なる世界であったからである。また、唐から宋へと至る中国における大きな変化が間接的に影響を及ぼした結果でもあった。こうしたことは、奈良や京都を「中央」とし、青森などの北東北を「周縁」とする見方や、「日本史」と「世界史」という切り離された枠組みの中では捉え切ることのできるものではなかった。

日本史と世界史を融合して考える際には、現在の日本の国土をアプリアリなものとして考えるのではなく、また我々の「中央－周縁」の意識を見つめ直すことが前提となってくる。義経北行伝説そのものは、あくまでも荒唐無稽なフィクションでしかないのだが、そこには現在の私たちとは異なり、国境という概念に縛られることなく生きてきた人々の意識が投影されている可能性もあり、現在の私たちの固定観念を相対化するヒント、そして日本史・世界史を融合した東アジア世界のとらえ方を考える上でのヒントを提示してくれているようにも思える。

本稿では教材研究ノートの段階に留まっているのだが、今回明らかにしたことをもとに今後は日本史・世界史融合の教材として具体的な授業化をはかり、提示していきたいと考えている。

注・参考文献

- 1 地域から考える世界史プロジェクトホームページ <http://blog.livedoor.jp/csekaishi/>
- 2 観光庁「広域観光周遊ルートについて」<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/kouikikankou.html> (2015年7月25日最終閲覧)
- 3 齊藤利夫『平泉－北方王国の夢』（講談社）2014年、柳原敏昭編『東北の中世史1 平泉の光芒』（吉川弘文館）2015年ほか
- 4 小谷部全一郎『成吉思汗ハ源義経也』（富山房）1924年、正部家種康『北の義経伝承』（伊吉書院）1995年
- 5 岩手県や青森県では自治体や観光協会などの公的機関のホームページでも、観光ルートの一つとして義経北

- 行伝説が詳細に紹介されている場合がある。例えば、岩手県宮古市や青森県八戸市のホームページなどがあげられるが、岩手県（県北広域振興局、沿岸広域振興局）は詳細なガイドマップを作成し公開している。
<http://www.kuji-tourism.jp/yoshitsune/>
- ⁶ 高橋富雄『義経伝説－歴史の虚実』（中公新書）1966年、五味文彦『源義経』（岩波新書）2004年
- ⁷ 小谷部全一郎 前掲書、p.31
- ⁸ 正部家種康 前掲書、八戸市ホームページ <http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/27,61503,90,html> (2015年7月20日最終閲覧)
- ⁹ 上出憲幸「暗礁の大根に代表される難所の尻屋崎」日本海難防止協会『海と安全』No.527, 2005年 <https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2005/00324/pdf/0001.pdf> (2015年7月15日最終閲覧)
- ¹⁰ 鈴木正崇『山岳信仰』（中公新書）2015年、p.68
- ¹¹ 『青森市史 第十巻 社寺編』pp.303～304
- ¹² 「求菩提山修験道と龍神信仰」『求菩提資料館ジャーナル』第15号 <http://kubote-historical-museum.com/journal.html> (2015年6月30日最終閲覧)
- ¹³ 鈴木正崇 前掲書、p.29
- ¹⁴ 大石直正「地域性と交通」『岩波講座 日本通史 第7巻中世1』1993年、p.133
- ¹⁵ 柿生郷土誌刊行会『ふるさととは語る－柿生・岡上のあゆみ－』1989年、p.33
- ¹⁶ 豊島修『熊野信仰と修験道』（名著出版）1990年、p.77
 なお、神倉神社の場合には、「倉」の字が用いられるが、神倉山の場合には豊島の文献にもあるように「蔵」の字をあてることがあるようだ。「神蔵峯」という標記もみられる（『彦山流記』）。また、神蔵氏の場
- 合には「倉」が記されることもある。例えば、町田市能ヶ谷にある神蔵宗家の屋敷である香山園庭園には「神ノ倉」と記された石碑がある。
- ¹⁷ この付近には、他の神社に合祀されたり、他の神社の境内社として移設された熊野神社のほかにも、合祀も移設もされることもなくいつの間にか姿を消した熊野神社があった可能性もある。例えば、川崎市麻生区片平には、熊野下や熊野堰跡という場所があり、熊野神社そのものの痕跡を見つけることはできないが、存在の可能性をうかがわせるものがある。
- ¹⁸ 瀬川拓郎『アイヌの世界』（講談社）2011年、pp.98～101
- ¹⁹ 豊島修 前掲書、pp.12～15
- ²⁰ 瀬川拓郎『アイヌ学入門』（講談社現代新書）2015年、pp.274～275
- ²¹ 井上鋭夫『山の民・川の民－日本中世の生活と信仰－』（平凡社）1981年、p.104
- ²² 永原慶二編『常滑焼と中世社会』（小学館）1995年、pp.239～243
- ²³ 瀬川拓郎 前掲『アイヌの世界』、pp.130～131
- ²⁴ 箕島栄紀「北方社会の史的展開と王権・国家」『歴史学研究』No.872、p.42
- ²⁵ 瀬川拓郎 前掲『アイヌ学入門』、p.275
- ²⁶ 齊藤利夫 前掲書、pp.147～148
- ²⁷ 菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』（北海道大学図書刊行会）1995年
- ²⁸ 『厚真村史』1956年、pp.797～798

(2015. 7. 31 受理)